

平成30年6月15日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02912

研究課題名(和文) モンゴル帝国治下江南知識人の「中国」認識

研究課題名(英文) The Concepts on "China" as the View from Jiangnan Literati under the Mongol Empire

研究代表者

櫻井 智美 (Sakurai, Satomi)

明治大学・文学部・専任准教授

研究者番号：40386412

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：モンゴル帝国の世界史上の役割に注目が集まる中で、当時の人々がその時代をどうとらえていたのかについて考えるため、特に「中国」という用語に注目して検討を行った。モンゴル時代に「中国」が大きくなったという研究史的な見方があるが、とりわけ、江南知識人が考える「中国」が何・どこを指し、どのようなニュアンスを持ったのかを考察することで、彼らの考える「中国」の範囲が広がるのではなかったことを明らかにした。華北と江南の知識人の意識の差や、元代における嶺南(広州を含む)と江南の関係性、江南史における元代の位置づけについても言及した。

研究成果の概要(英文)：While the attention to the role of the Mongol Empire on the world history was attracted in these days, I paid attention, in particular, to terminology as "China" and examined it to think about how people in those days recognized those period. There is a point of view of historical research that "China" became wider in the Mongol period, but I made it clear that the reach of "China" Jiangnan intellectuals those days considered didn't spread by means of researching what and where "China" pointed, and what kind of nuance it had. I also mentioned about the difference in consciousness about it among intellectuals in North China and Jiangnan, the relationship between Lingnan (including Guangzhou) and Jiangnan, and the position of Yuan period in the Jiangnan history.

研究分野：元朝史

キーワード：モンゴル帝国 中国 江南 元代 士人 広州

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内外の研究状況

モンゴル帝国統治下の「中国」の研究は、1980年代以来、史的に、また方法的に大きく変化した。稀少史料の出版と未公開史料の公開、及び、中国の改革開放に伴う現地調査の進展がその背景にあった。これら研究進展の過程で新たな史料として注目されてきたのが、新出・新公刊を含む石刻史料・文書史料であり、利用しやすくなった典籍史料であった。これら新出利用を用いた研究では、史料それ自体のあり方をも問う点で、文献を中心とした従来の歴史学研究では明らかにし得なかった個別性・具体性を持った分析が可能となった。その中でも、石刻史料については、日本を皮切りに、中国・台湾・モンゴル本土など各地において、関連する石刻史料の整理と研究が飛躍的に進んできた。

そして、ここ30年来のそれらの史料や調査法を用いた研究の結果、本研究課題と直接関連する成果として、(a)華北における道教教団を中心とする宗教と政権の関係性、及び(b)曲阜をはじめ漢地における儒教・儒学の振興策とその対応についての研究が飛躍的に増加した。これらの研究によって、モンゴルによる中国支配の様相や、政治と宗教の関係性の解明が進んだ。

しかし、これらの研究は、それが扱った史料の残存状況などの条件により、中国華北を研究対象とするものが主であった。ここ20年来の元代史研究の論著のうち、江南を主対象として扱うものは15%ほどに過ぎない。その中で、高橋文治氏らによって江南道教の正一教集団がモンゴル政権とよしみをつなぐ状況が詳述されたことや、森田憲司氏や宮紀子氏らによって、儒教保護や出版推進の諸政策の分析が進んだことが、少ない研究の中では特筆される。これらの研究によって、漢文化を理解しなかった、もしくは傷つけたモンゴル政権のイメージは根本から覆され、中国史の発展を断絶した元、という中国史における元代の位置づけは大きく覆された。また、貿易・海運や商業など、経済活動に関わる研究が、江南を扱うことが多かった。

一方で、米国の中国史学界では、日本の唐宋変革・明清変革論や、かつての征服王朝理論を明確に意識した上で、今世紀初頭に「宋元明移行期論」という新たな概念が11～15世紀の中国史に設定され、その検討対象の中心は江南とされた。この概念は、中国や日本の学界にも大きなインパクトを与えた。しかし、この「宋元明移行期論」の根拠となる時代認識は研究者レベルで依然大きく異なっており、その江南分析の視点や深度についても、検討余地がまだ多く残されている。そして、何より問題なのは、日本の宋代史・明清史の分野で「宋元明移行期論」への対応がなされているのに対し、元代史における検証は未だしと言わざるを得ない点である。

(2) 自身の準備状況

そのような中で、研究代表者は、これまでも、石刻史料をはじめとする新出史料を積極的に活用しつつ、上記の(a)(b)に密接に関わる研究を進めてきた。特に、この10年ほどは、モンゴル政権による「中国」的祭祀活動の中でも五岳四瀆の祭祀に注目して、その活動に関連した石刻史料の分析を精力的に進めてきた。

「モンゴル帝国時代初期中国黄河流域支配の政治史・文化史的研究」(科学研究費補助金・若手研究(B))では、中国河南省を中心とした道教・岳瀆祭祀の様相の解明を目指し、現在の済源市にある済瀆廟について、河北省にある北岳廟と比較しながら、元代モンゴル政権がその地に対し局地的に教育・文化の重点政策を行ったことを明らかにした。この研究成果をうけて、研究の視点を祭祀活動そのものから、政府による祭祀活動全般へとひろげ、「モンゴル帝国治下中国における宗教の様態と政権の関係」(科学研究費補助金・若手研究(B))で、元代の宗教・教育・祭祀活動について、総合的に史料を収集し、モンゴル政府における岳瀆祭祀の性格と祭祀活動が元代にもつ重要性とを改めて指摘し、岳瀆祭祀が政権によって重要視される理由に、五岳四瀆が漢地=「中国」の「領域」認識と密接に結びついていることがあるという仮説を提起した。

この研究によって、政権による祭祀活動や文化政策の具体的な様相についてはかなり明らかになってきたと考えられる。しかしながら、申請者を含めた従前の宗教政策・文化政策の研究において、政府の主催する行事・政策を受け止める中国の人々の認識については、乙坂智子によるチベット仏教を中心とする一連の研究を除き、分析がおろそかになってきたと言える。

(3) 学術的問い

一方で、13・14世紀のモンゴル時代の時代的特徴について考えると、その時代、「中国」は3世紀以上の分裂に終止符が打たれ、モンゴルによる統治のもとで、チベット・モンゴル・雲南などが漢地に結合されたことに気づく。つまり、この時代は、中国の歴史上、小さな組織体である「小さな中国」から広域集合体としての「大きな中国」へと変化する大転換点にあたるのである。その転換点としてのあり方や構造を明らかにしようとするならば、在地社会そのものや、政治と在地社会をつなぐ士大夫・知識人の考え方についても明らかにすることは必須である。

そこで、モンゴル統治下の「中国」について、特に江南の知識人たちが政府の諸政策をどう見つめたのか、時代に対してどのような見解を持ち、どのようなスタンスをとったのか、ということ明らかにすることから、時代像の構築を図っていきたく考えた。

2. 研究の目的

本研究では、「小さな中国」から「大きな中国」への転換点としての時代のあり方と、それに対する士大夫・宗教指導者などの認識について、中国経済の中心たる江南の出身者や、江南を活動の舞台とする人物を対象を絞り、明らかにすることが目的である。彼らが関わる政治・社会・教育・文化などについて、以下に挙げるこの時代の特徴的な事象に特に焦点を絞って分析を進める。この4つの論点の設定にあたっては、米国で近年提唱された「宋元明移行期論」の分析角度とは異なる視点を敢えて選択した。

a, 元代江南士人の学問様態や知識獲得のやり方について具体例を通して考察する。考察の前提として、海外の多分野の先行研究について網羅的に理解してまとめる。

b, 国家による積極的な祭祀活動に対する地方士人の認識と対応について、江南を舞台とする祭祀活動の特徴や意味づけを行う。

c, 「大きな中国」の誕生にともなう交通や移動の活発化とそれに対する江南士人の認識や行動を追究する。そもそも、彼らが「中国」というものをどう捉えていたのか、「そして「中国」は大きくなったと認識していたのか分析する。

d, 元末の張士誠・方国珍政権など諸勢力の台頭状況における江南の社会的ネットワークのあり方について分析を進めるため、元末の学問に関わる史料整理を行う。

これらの研究を通じて、新出史料を用いて個別に行われてきた政治と宗教、政治と社会、政治における祭祀活動の研究と、従来の史料の分析を中心とする士大夫・宗教指導者の認識研究との総合化を実現する。また、13・14世紀を「小さな中国」から「大きな中国」への転換点ととらえる視点を具体的な諸側面から検証し、中国史におけるモンゴルによる支配の積極的な位置づけをより明確にする。

3. 研究の方法

「研究の目的」で挙げた4つの論点に沿って、順次考察を進めて行く。まずaについて、江南士人の学問や知識の枠組みを理解し、それが華北の状況と異なるのかという視点で比較検討を行う。bについて、これまでの自身の研究成果が華北に偏っていたため、江南の祭祀について研究を進める。その上で華北と江南の事例を比較する。それらの考察の上に、cについて、「大きな中国」という研究上の見方に対して、当時の士人が実際にはどう考えていたのか、という問題を考えていく。「大きな中国」を意識していたのかどうか、意識していたとすれば、それをどう解釈・評価したのか。ここまで明確にした上で、dについてはさらに、元代の中での時間的推移を検討するための準備段階として、元末史料の整理を行う。具体的な史料が発掘できれば、それを分析する。

初年度は、所属大学において1年間、国立中央研究院歴史語言研究所（台北）において在外研究を行っており、aを進めるのにより環境である。その史料収集の便宜を生かし、史料の基礎的な分析を進める。江南土人数名を採り上げ、その履歴を辿りながら、「大きな中国」に対する認識と対応について検討を開始する。一方で、台湾における中国史、とりわけ元朝史研究の現状を理解する。台湾には中国社会史の研究蓄積があるため、特にその点について調査を進める。また、モンゴル高原や江南の現地踏査を進め、風土や風俗の違いを理解する。

次年度は、その調査データを整理するとともに、bについても、石刻史料を中心に具体的な史料の分析を進める。併せて、地方祠廟における祭祀の様相について理解する。

最終年度は、cについて3年間の考察をまとめるとともに、祭祀活動の南北差違や江南士人の意識などについて学会発表や論文執筆を行う。総括としてワークショップを開催したり、研究報告書をまとめたりすることも目指す。

4. 研究成果

(1) 研究集会の開催

本研究の成果の一つとして、まず、多彩な研究会の開催による学术交流を挙げることができる。平成27年度には、同年11月25日を第1回目とする「元代的江南士人」連続ワークショップを台北で主催した。本ワークショップは、宋遼金元を専門とする台湾研究者に呼びかけて、3回に涉って（平成28年1月15日・3月4日）18人の研究者（のべ44人）の参加を得た。その中で、日本・大陸・台湾・米国におけるモンゴル帝国史・元朝史研究のトレンドや問題点について認識を共有し、「江南」研究に関わる新たな課題を探った。同時に、本研究に対する研究報告を2度行い、それに対する意見を拝聴した。そこで、宋元時代の地図を用いた研究を加味する必要性が指摘され、この研究会で問題意識として共有された。

翌年度中は、国内の既存の研究集会に参加し、台湾での研究内容の普及に努め、最終年度には、国際交流の進展も念頭に、台湾の元史研究の第一人者たる洪金富氏を招聘して、講演会及びワークショップ「元代史料と江南研究」を開催した。ワークショップでは、洪氏の基調講演と2人の話題提供をもとに、自由に討論を展開した。洪氏は『元典章』研究の第一人者であり、江南で出版された法制史料『元典章』を論の中心として、出版の背景・経緯やそこから読み取れる江南の事象とともに、『元典章』を含めた元代史料研究上の整理方法についても、国際的な議論でできたことが大きな収穫であった。江南の各地で、ある史料が出版された背景を探ることが、当時の江南知識人たちの意識を探る手段となることを改めて認識できた。

(2) 祭祀・文化研究の進展

平成 27 年夏期に、モンゴル帝国の中枢にあたるモンゴル国及び内蒙古の現地踏査を、冬期には、江南の中でも海上交易の拠点となった泉州・広州を踏査し、祭祀関係の遺跡や関連博物館を中心に、13～14 世紀当時の遺物や遺構について実見した。その中で、広州に現存する岳瀆廟である南海神廟を研究対象の中心において、国家祭祀の様相と地域土人の対応を追究した。この研究を通し、国家祭祀が政府の領域概念・地域概念を示唆するという前課題で出した仮説が根拠を持つかたちで証明された。地方土人は、祭祀を通じて政権の意図を理解する一方、地域の伝統に沿った祭祀が続けられている点や、元代における江南・嶺南の違い、元朝における広州の位置づけが明確になった。華北の祠廟が政府の中心人物によって、政治動向に概ね沿うかたちで展開されるのに対して、江南の祠廟が地方の論理を強く反映していることが明らかになり、前後の時代と時代を越えて存在する江南史の枠組みが強く意識された。

(3) 江南土人の時代認識に関わる問題

初年度、本務校で利用できない(もしくは個人による多額の支出を伴う)先行研究や古籍史料を多く収集することができたため、内容を分析する以外に、「中国」という表現に関して、数量的な分析も開始した。翌年度、「中国」の用例などに加え、新たに「混一」や「南北」の意味についても『事林広記』の記事を中心に検討を進めた。その結果、「混一」の対象として指すところが、おおむね漢人士大夫が考える「伝統的な中国」の範囲に止まり、「南北」が指すのも同じく「伝統的な中国」の南北であることがわかった。また、台湾におけるワークショップで意識された新たな課題、つまり 13～14 世紀の地図の問題について、宮紀子氏を初めとする一連の成果を再検討するとともに、研究協力者とともに中国国家図書館において関係の文献を調査した。この調査では、江南という地方と対照的な首都北京の郊外踏査・石刻史料調査も同時に行った。それらを踏まえて、『事林広記』に見える江南土人の意識を検討した結果、彼ら自身が南宋を継承した元に所属しているという意識が、少なくとも 1340 年代まで続いていたことが明らかとなった。この研究結果は、学会発表は行ったものの、現時点で論文として公にできていない。今後論文文化を目指していく。

(4) 新たな研究展開の中で

元末を中心に江南の土人の認識を探る手段として、史料整理を行った中から、科挙対策書として『皇元大科三場文選』に注目した。本書は元末の科挙合格者の答案集の「対策」部分であり、その一部の訳注を公刊した。本書は現時点において国立公文書館のみに所蔵を見る孤本とされている。分析の結果、本

書が科挙対策書としてだけでなく、江西の安西地区出身の合格者を顕彰する目的も兼ね備えている可能性を見出した。また、元代の科挙対策に朱子学系統の書籍や『文献通考』などが用いられたことについて実証できた。類似する元末の書籍は多数存在し、今後その検討が必要なことも認識された。

最終年度には、本研究のまとめと新たな研究への展開を企図して「中国史における江南と四川」のシンポジウムを開催した。その中で、元代における江南の概念変化と、宋元交替による四川の中国史上の位置づけの変化が明らかになった。また、研究報告書を冊子として刊行し、台湾でのワークショップ参加者と中国の若手研究者、及び国内のモンゴル帝国史・元朝史研究者に配布した。

(5) 国内外における位置づけ

本研究は、代表者単独で行った研究であったが、協力者の協力のもと、特に海外研究者との討論や共同研究を積極的に進めることができた。研究報告書を国内の関係者に送付し、その結果、特に嶺南・広州の位置づけについて有益な意見を得ることもできた。本研究の遂行により、日本の元史研究を中国を初めとした海外に発信できたことは意義があると思う。

「中国」に対する認識についての研究は、中国では政治的な問題との関連を連想され、扱うことが難しい面もあるが、外国人だからこそ政治とは切り離れた立場から検討を進められた。検討結果については、まだ、国内外での学会発表に止まっており、口頭での意見を頂戴したのみであるが、江南史的な見方が妥当であるという意見などを得た。また、中国史としての元代史の位置づけをもう一度直視するきっかけになった。

祭祀に関わる研究は、中国でも盛んに行われおり、不足していた宋代の地方祠廟研究が一気に進んできた。その中で、本研究は、招待講演における言及も含め、早期に公にできた。それら中国の研究にも影響を与えられたと考えている。

(6) 今後の展望

本課題において、元代の岳瀆祭祀研究に一区切りつけることができた。また、江南史の枠組みの重要性も提起できた。しかし、「宋元明移行期論」については、本課題開始後、中国元史学界での言及が増えていき、そこで南北差違を視野に入れるべきものとして認識されていることがわかった。江南土人の認識をまとめた上で、改めて「宋元明移行期論」について考えてみたいと思う。

また、本研究では、数量的な分析を含めた史料用語の検討を行ったが、「中国」「混一」などの用語以外についても、同じような視点から、数量的な分析が可能である。それによって、新たな研究方法も提示できるのではないかと考える。

最後に、本研究を通じて、海外の学術動向をつぶさに知ることができた。そこでは、デジタルデータと SNS の活用など、日本には存在しない研究のためのベース作りが官民挙げて用意されている状況が見られた。日本で研究する身として、それらへアクセスしない限り、研究のトレンドを把握できない危惧を強烈に感じた。自身の史料読解に対する努力は続ける一方で、日本においても研究組織や国際協力の窓口としての枠組みづくりも喫緊の課題であると強く認識させられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

櫻井智美、「元代の南海廟祭祀」、『駿台史学』、第 162 号、2018 年、pp.27-54、査読有

石山裕規・櫻井智美・田畑成基・森本創、「『皇元大科三場文選』「策」校注」、『明大アジア史論集』、第 21 号、2017 年、pp.116-99 (逆 pp.27-44)(担当部分:pp.116-113(逆 27-30)「はじめに」) 査読有

〔学会発表〕(計 4 件)

櫻井智美「『事林広記』中的正統」、蔡美彪先生九十歳記念元史シンポジウム、2017 年

櫻井智美「南海神廟祭祀をとおして見る元代の広州」、第 8 回東アジア石刻研究会、2016 年

櫻井智美「元代江南知識人にとっての「中国」」、平成 28 年度東洋史研究会大会、2016 年

櫻井智美「元代江南祠廟と地方士人 南海神廟を中心として」、楊志玖先生生誕百周年記念隋唐宋元時代の中国と世界国際シンポジウム、2015 年

〔図書〕(計 1 件)

櫻井澄夫、人見豊、森田憲司、櫻井智美、ほか 26 名、明石書店、『北京を知るための 52 章』2017 年、総 365(担当:pp.154-158) ISBN 9784750346014

〔その他：招待講演〕(計 2 件)

櫻井智美、「元代江南士人社會研究：從碑刻資料研究的角度」成功大學、2016 年

櫻井智美、「宋元時代的岳瀆祭祀—以濟瀆廟和南海廟為中心」、暨南大学、2015 年

〔その他：翻訳・書評・調査報告〕(計 4 件)

櫻井智美、「書評：井黒忍著『分水と支配 金・モンゴル時代華北の水利と農業』」、『史学雑誌』、第 125 編第 1 号、2016 年、pp.80-88、査読有

櫻井智美、「2015 年夏期モンゴル調査筆記」、『明大アジア史論集』、第 20 号、pp.98-102、査読無

櫻井智美、「翻訳：陳雯怡「大隠は士に隠る」「元史・隱逸伝」に見る元代の隱逸」」、宋代史研究会編『中国伝統社会への視角』(宋代研究会研究報告集第十集、汲古書院) pp.374-331

6. 研究組織

(1) 研究代表者

櫻井 智美 (SAKURAI, Satomi)
明治大学・文学研究科・専任准教授
研究者番号：40386412

(4) 研究協力者

森本創 (MORIMOTO, Hajime)
石山裕規 (ISHIYAMA, Yuki)
牛瀟 (NIU, Xiao)